

平成27年度(平成28年産)麦類栽培技術情報(古川農試)[1月15日調査結果]

1. 気象概況[10月上旬～1月上旬] (表1, 図1)

- 平均気温は、10月中旬以降は平年並。
11月は平年並から高く、12月は平年より高かった。1月上旬は平年より高い。
- 降水量は、10月は県内24観測地点中14地点で少ない方から1位を記録した。11月は多雨となり、14日には大雨となった。12月上中旬は多雨で、1月上旬は少ない。
- 日照時間は、10月は多照で県内18観測地点中16地点で、多い方から1位を記録した。11月は平年並からやや少ない。12月はやや多く、1月上旬は平年並み。

表1 気象経過(10/1～12/20)古川アメダス

	平均気温(°C)		積算降水量(mm)		積算日照時間(hr)	
	本年	平年差	本年	平年比	本年	平年比
10月上旬	14.8	-1.0	12.0	26%	82.9	196%
10月中旬	13.5	-0.2	1.0	3%	63.8	138%
10月下旬	11.2	-0.3	3.5	10%	71.1	133%
11月上旬	10.4	0.7	38.5	147%	44.2	97%
11月中旬	10.5	3.1	73.0	356%	43.4	105%
11月下旬	5.9	0.4	38.5	182%	35.5	85%
12月上旬	4.3	0.2	29.0	162%	40.7	108%
12月中旬	5.4	2.9	43.0	339%	41.4	117%
12月下旬	2.6	1.0	11.5	78%	45.3	107%
1月上旬	3.0	2.6	3.0	20%	37.0	95%

注) 平年差(比)はアメダス平年値との比較

2. 生育概況

1) 1月15日現在の生育状況(表2)

- 草丈は前回調査並で、降雪がほとんど無かったため、平年の2月10日並から上回っている。
- 茎数は分けつが進み平年の2月10日並から上回っている。
- 葉数は平年の2月10日を上回り、早い生育となっている。

2) 幼穂長(表3)

- 大麦の幼穂長はまもなく1mmとなり、幼穂形成始期に達すると考えられる。
- 小麦の幼穂長は早生のあおばの恋で確認したところ暫定値であるが12月中には幼穂形成始期に達していたと考えられた。

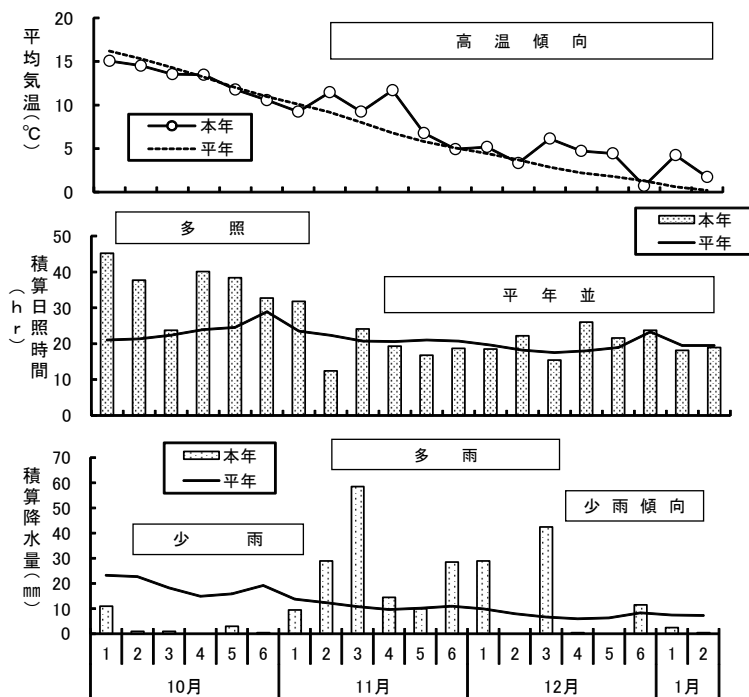


図1 半月別気象経過(古川アメダス)

表2 生育状況(1月15日現在)

品種	草丈 (cm)	参考値		茎数 (本/m ²)	参考値		葉数 (枚)	参考値	
		H27	平年		H27	平年		H27	平年
		12月15日	2月10日		12月15日	2月10日		12月15日	2月10日
シュンライ	12.6	12.9	11.0	791	589	821	5.4	4.2	5.2
ミノリムギ	13.4	14.1	12.2	849	577	845	6.3	5.2	5.2
あおばの恋	16.9	16.4	13.1	729	541	728	5.4	4.4	5.0
シラネコムギ	14.0	14.2	12.6	873	551	789	6.2	5.0	5.3
ゆきちから	11.4	12.8	12.1	679	421	762	5.7	4.6	5.3

表3 幼穂長

品種	幼穂長 (mm)	参考値		幼穂形成始期 (月/日)	
		H27	平年	本年	平年
		12月15日	2月10日		
シュンライ	0.96	0.5	1.1	—	2/3
ミノリムギ	0.95	0.6	0.9	—	2/15
あおばの恋	1.20	0.6	0.9	12/26 ※1	2/22 ※2
シラネコムギ	未調査	0.2	0.3	—	3/16
ゆきちから	未調査	0.2	0.3	—	3/21

注1) 参考値は前回調査値と平年値(2月10日)

2) 幼穂形成始期:幼穂長1mmに達した日

※1 幼穂形成始期は暫定値である

※2 平年値は過去3か年の平均値

3. 当面の技術対策

今後の気象予報では、平年並みの低温が予想されていますが、播種期以降の好天で生育は例年に無く早く進んでいるものと見られます。

このような生育状況から幼穂形成期に入ったほ場もありますが、生育が早まりすぎると寒波による低温障害が懸念されます。現時点で早まった追肥をしないよう次のことに留意して下さい。

1) 幼穂の伸長程度を確認

必ず実施して下さい。幼穂長によっては、対策が悪影響となる場合があります。

測定は、生育が中庸な株で3株以上をサンプリングし定規などで確実に計ること。

※調査方法は、普及センター等に相談して下さい。

2) 踏圧(麦踏み)の実施

主稈長が20mm以下であれば、幼穂に悪影響を与えること無く伸長抑制が可能です。

ほ場条件を見極めて実施します。土入れや中耕が可能なほ場では、そのほうが効果的です。

低温障害対策以外でも踏圧の実施は重要です。踏圧は3葉期から始め、1枚出葉する毎、あるいは挫折した茎が立ち直る毎に茎立ちが始まる前までの時期で回数を増やし実施します。

ただし、重粘土壌の場合は逆効果となります。根の発育障害が大きくなるので通常は行いませんが、茎立ちが早まりそうな場合には、特に土壌の状態に注意し、乾燥条件で行い回数も控えめにを行います。

3) 排水対策

昨年は、春先に大雪や大雨がありました。

湿害による被害は、節間伸長期頃から顕著になります。春になり気温が高くなってくると滞水によって土壌が還元状態となり根腐れの発生も心配されます。

現時点で生育の悪いほ場は、湿害の影響を確認して下さい。

春になり降雨が多くなる前の、今のうちから明渠の確認、排水路の手直しなど、排水対策に万全を期しましょう。

4) 追肥

冬期間は気温も低く、施用しても吸収されにくく効果が低くなります。また、耐寒性を落として低温障害を受けやすくなることも懸念されます。

生育が良好な場合、及び株直しの必要がない場合は追肥の必要はなく、通常どおりに幼形期からの追肥とし、葉色を見ながら必要に応じて株直しを行います。状況によっては最寄りの普及センター等に相談して下さい。